

高尾ひとみ 令和3年6月度特別作品

奥出雲

高尾ひとみ

奥出雲は、素戔鳴尊(スサノオノミコト)が八岐大蛇(ヤマタノオロチ)を退治したという神話の舞台です。舞台の中心である船通山の麓には盆地が広がり、棚田には人々の丁寧な仕事が見えます。稲が風にそよぎ、家々にも道端にもさまざまな花が咲き、鶯は聞き惚れるほどの声で鳴き、蛙もいたるところに鳴いています。いにしえの神々もこの山里を楽しんだであろうと思いをながら、私もこの地に流れているゆつたりとした時の中にいました。

奥出雲まづ鶯の鳴きにけり

花の塵林の風に舞ひあがる

名を知らぬ春禽の鳴く神の山

切り岸の滝は真つ直く落ちにけり

かたかごの花見て越ゆる峠かな

芋環に川はゆつくり流れたり

山里を藤の寺より見おろしぬ

雨雲の過ぎたる里に河鹿鳴く

耳澄ませ橋の上から河鹿聞き

せせらぎに沿うて鶺鴒飛びゆけり

《作品鑑賞》

亜矢

「奥出雲」は、作者が地元の人間ではないからこそ、真っ新な心で当地の自然と向き合っていると感じた。生命力にあふれた動植物の様子は、今も昔も変わりはない。そして未来も変わらないでほしい。そんな思いが伝わってくる作品である。

奥出雲まづ鶯の鳴きにけり

奥出雲が、作者に挨拶をしているかのよう。一句目として、「まづ」が効果的である。

名を知らぬ春禽の鳴く神の山

何の鳥かわからないという、神秘なところが神の山ととても合っている。他の季節の鳥では合わない。

芋環に川はゆつくり流れたり

恐らく、小さな川である。上五の「に」によって、景が広がった印象。